

【巻頭言】 附属学校教育局次長 篠塚明彦

「次期学習指導要領はどのようなになるのか」

- 2 この夏の学び～附属学校教員研修～——萩庭圭子
- 3 睡眠健診：データで可視化する自分の睡眠——早貸千代子
- 3 幼稚部行事「さくら組おたのしみ会」——高橋里子
- 4 本校全学部で水泳指導始まりました——永田悠祐
- 4 生徒が創りあげた大自然の中での「黒姫高原生活」——栖原 昂
- 5 歩いて地域を「知り直す」—地理総合の実践——中村光貴
- 5 スポーツデー—理療の歴史に触れ歩く———玉井伸典
- 6 セタ祭り～織姫と彦星の劇～——森 敬子
- 6 インドネシアから広がる国際協働の輪——建元喜寿
- 7 美しい日本の伝統工芸に触れよう—高等部「美術」出前授業——杉田葉子
- 7 つくばっ子が乗り越える3つの山——青山尚司
- 7 5月から6月にかけて健康診断を行いました——恒次律枝
- 8 第12回 共生シンポジウム



筑波大学
University of Tsukuba



附属久里浜特別支援学校
「卒業制作 Over the Rainbow」

次期学習指導要領はどのようなのか

附属学校教育局次長 篠塚明彦



SHINOZUKA
AKIHIKO

中央教育審議会の教育課程企画特別部会で、令和8年8月31日に、次期学習指導要領に向けた審議のまとめの素案が示された。素案では、現行学習指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」を発展させ、子ども一人ひとりが自らの人生を主体的に切り拓き、持続可能な社会の担い手として成長することを目指している。特に、「好き」や「得意」を伸ばしながら、多様な他者と協働し、自ら考え判断する力の育成を重視している。

素案の大きな特徴は、学習指導要領の構造化と教育課程の柔軟化である。各教科で育成する資質・能力をより明確に示し、デジタル化によって教師が活用しやすい学習指導要領の実現を目指すという。また、学校や地域の実態に応じて授業時数を調整できる「調整授業時数制度」が提案されており、生み出した時間は、別の教科への上乗せや新教科、児童生徒の実態に応じた学習、教員の研究・研修などにも充てることができるという。

さらに、AI時代への対応として情報教育の充実が図られ、情報活用能力やメディアリテラシー、情報モラルを一層重視し、小・中・高を通じて体系的に学ぶ仕組みが検討されている。また、学習内容の精選によって知識の量だけでなく理解の深まりを重視し、評価方法の改善や不登校、特別支援、外国につながる子どもなど多様な学習者への支援の充実も示された。

次期学習指導要領は「深い学びの実現」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」を中心として、AI時代にふさわしい柔軟な教育課程への転換を目指しているようである。

この夏の学び～附属学校教員研修～

附属学校教育局教育長補佐 萩庭圭子

令和8年の夏季休業中、附属学校教育局主催の研修会が様々行われました。その中から「管理職研修」と「中堅教諭等資質向上研修」についてご紹介します。いずれも例年の研修内容・方法を大きく変え、各学校の課題解決に向けたより実践的な研修を行いました。

【管理職研修】11校の校長・副校長が集まり、様々な課題解決の基本となる考え方やスキルを学び、ケースワークを通して自校の校内体制を点検・改善できるよう取り組みました。生徒指導提要の改訂に関する協力者会議の座長を

指導といじめ防止等の要点」と題し、改訂された生徒指導提要に沿ってご講義いただきました。また京都教育大学大学院教授の片山紀子先生から、子どもの人権に配慮した聴き取りとその記録について学びました。それらを踏まえ、いじめ防止・対応ができる校内体制づくりについてケース演習を行いました。組織として機能することが児童生徒と教職員を守ることにつながる、そこをどう動かすか、について考えました。

【中堅教諭等資質向上研修】この研修は在職期間が10年程度に達した教諭等が対象で、校内ではミドルリーダーにあたる教諭等です。グループワークでは活発に意見交換がなされ、日々の業務を振り返りました。演習は先の管理職研修と同様、いじめをはじめとする諸問題の組織的対応をテーマとし、ミドルリーダーとして何をすべきか、新たに何ができるか、を考えました。今回の研修で決めたミドルリーダーとしての実践について、次回12月の第2回研修会で報告していただきます。

務めた東京理科大学教職教育センター教授で日本生徒指導学会の会長でもある八並光俊先生を講師に迎え「令和の生徒

生徒指導提要

令和8年12月

文部科学省



「生徒指導提要」表紙

生徒指導の記録の取り方

生徒指導の記録の取り方
生徒指導の記録の取り方
生徒指導の記録の取り方

萩庭圭子・片山紀子 監修

- 1 実際の記録の事例に沿って解説を掲載・再編集！
- 2 個人メモや個人記録・公的記録の流れをわかりやすくイメージ化！
- 3 いじめ、不登校等、事例別のポイントも掲載！

書籍「生徒指導の記録の取り方」表紙

睡眠健診:データで 可視化する自分の睡眠

附属駒場中学校・高等学校 養護教諭 早貸千代子

「昨晩は○時間しか寝ていない」という声をよく耳にします。思春期に必要な8～10時間の睡眠確保は、勉学に加え、スマホ等の誘惑もあり容易ではありません。この睡眠時間の不足が重なる睡眠負債の状況を改善すべく、学校医の勧めもあって「睡眠健診」を4月の定期健康診断の一環として導入しました。

本健診は、加速度センサー型ウェアラブルデバイスを手首に1週間装着し、睡眠の量・質・リズムを可視化するものです。実施後、生徒からは「普段ないがしろにしがちな睡眠に意識が向いたし良い機会となった」「平日と休日のズレを再認識した」といった気づきや、「早く寝よう」「寝る前のスマホを控えよう」などの行動変容が見られました。毎日の振り返りを通じ、自身の体調と睡眠の因果関係を客観視できたことは大きな収穫でした。自律的な改善意識が芽生え、睡眠を単なる休息ではなくパフォーマンス向上のためとしてとらえなおす契機となりました。

一方で課題も明確になりました。入浴や部活時に外した後のつけ忘れが多発したほか、「手首だと勉強の邪魔」「時計機能がほしい」など装着感や運用面の不満が挙がりました。今後は運用上のハードルを克服しつつ、データの可視化を通じた「睡眠健診」を継続したいと考えています。生徒が自身の睡眠を主体的にコントロールし、生涯にわたるセルフマネジメント能力を養う基盤となることを期待しています。

※なお、データ分析は東京大学大学院医学系研究科システムズ薬理学教室/ERATO 上田生体時間プロジェクトが実施しています。



睡眠覚醒パターンの解析結果
(昼12時から翌日12時までの
睡眠覚醒パターンを図示)



加速度センサー型ウェアラブルデバイス

幼稚部行事 「さくら組おたのしみ会」

附属視覚特別支援学校 幼稚部主事 高橋里子



力に触る

令和8年6月5日(金)に行事「さくら組おたのしみ会」を行いました。本行事は、年長児であるさくら組の子どもたちが校外に出かけ、体験的な活動に取り組む行事です。今年度は、電車を使って移動し、葛西臨海公園ならびに葛西臨海水族園へ行きました。

葛西臨海公園では、芝生広場の遊具で友達と一緒に体を動かして遊んだり、パークトレインに乗って心地良い風を感じたりするなど、屋外ならではの活動を楽しみました。レストランでは、あらかじめ保護者と相談して決めたメニューを注文し、友達や教員と一緒に食事を楽しむことを通して、社会経験の拡大を図りました。また、葛西臨海水族園では、飼育員の説明を受けながら生きているカニやヤドカリ、ヒトデ、ウニ、ナマコに触れる活動を行いました。「チクチクしている」「小さいね」など、気付いたことを話す子どもたちの姿からは、感触や大きさの違いに気付き、学びを深めている様子がうかがえました。さらに、園内の情報資料室では、ホラガイやハマグリ、ツメタガイなど様々な貝殻に触れてそれぞれの特徴を確かめたり、実物と同じ大きさ・重さのペンギンのぬいぐるみに触れながら体の仕組みを学んだりしました。体験的な活動を通して生き物への関心を高め、理解を深める充実した時間となりました。

ペンギンの重さを感じる

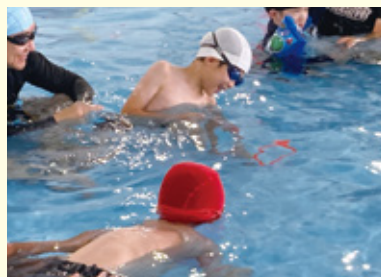


貝に触り比べる





本校全学部で 水泳指導始まりました



附属桐が丘特別支援学校
教諭 永田悠祐

小1・2 潜ってリング拾い

令和7年度から再び始まった本校の水泳指導ですが、小学部と中学部に加え、今年度より高等部も始まりました。高等部の生徒にとっては小学部の時以来の水泳ということもあり、期待に胸いっぱいの様子が見られました。令和8年度は8月31日から9月18日の3週間をプール週間とし、体育の授業を水泳指導として全学年3回ずつ行えるようにしました。陸上では動かしづかった身体を水中ではより大きく動かせる喜びを感じている児童生徒や先生たちの笑顔が見られ、水泳指導の価値を感じることができました。

小学部の児童たちは水慣れや伏し浮きや背浮きといった浮き方をバディの先生と一緒にいき、安全で楽しい活動ができました。昨年は怖かった水の中も、今年は笑顔いっぱい顔の水につけたり、潜ったりする様子が見られました。中学部の生徒たちは少しずつ泳法を試し、水の中で動くことや進むことを目標に活動することができました。昨年よりも多くの浮き具を準備しており、様々な姿勢で浮いたり泳いだりする様子や、手で水をかいて進みたい方向に動く様子が見られました。高等部の生徒たちは初めての新しいプールを大いに楽しみながら、水中での身体感覚を理解したり、クロールや平泳ぎなどの泳法で泳いだりして活動することができました。また、3回目の授業では、昨今の水難事故をテーマに、浮き具代替りのペットボトルやビニール袋を使った浮く体験を通して、水難事故対策を実践しました。浮くための方法が様々なことを知り、周囲の仲間の浮き方に感心する様子が見られました。



高3 自分なりのクロール



中3 様々な浮き具を使って浮く



生徒が創りあげた大自然の中での「黒姫高原生活」



附属中学校 教諭
栖原 昂

森の中でのトレッキング

7月中旬、本校の2年生は長野県・黒姫高原で3泊4日の宿泊行事「黒姫高原生活」を実施しました。澄み切った空気と豊かな緑に包まれた大自然の中、トレッキングや地学学習、コース別体験学習などを通して、教室では得られない学びを深めました。

本行事の大きな特長は、生徒主体による自治的な運営です。生徒による「黒姫委員会」がレクリエーションの企画や整列指示、生活全般の運営を担いました。また、委員からの連絡を受けた室長や班長が小グループのリーダーとして細やかに動き、互いに支え合いながらスムーズに集団行動を進めることができました。

特に印象的だったのは3日目の夜です。悪天候のためキャンプファイアを中止し、室内での集いとなりましたが、誰一人不満を口にすることなく、協力して良い時間にしようという想いにあふれていました。途中で天候が回復したことで急遽屋外に出て、マイムマイムを踊り、学年で選曲した「キセキ」を全員で歌うこととなりましたが、リーダーたちの迅速な連携とフォロワー一人ひとりの協力的な行動によって、感動的なひとときとなりました。そうした学年へのご褒美かのように、雲の切れ間から見えた満天の星空も忘れられない思い出となりました。

大自然の中で仲間と協力して行事を創りあげた今回の経験は、生徒たちの自主性を育み、学年の絆をいっそう深めたことと思います。



室長会合の様子

雨があがって屋外で合唱
3日目の夜





歩いて地域を「知り直す」—地理総合の実践

附属高等学校 教諭 中村光貴

1年生「地理総合」では、学校周辺を歩いて調査するフィールドワーク(FW)を行っています。本校は丸ノ内線茗荷谷駅と有楽町線護国寺駅のほぼ中間にあり、通学利用もほぼ半々です。そこで、比較的歩きやすい時期を選び、春と冬に両駅周辺を調査します。とくに春は教育実習期間と重なるため、教育実習生にも要所で生徒の学びを支えてもらい、FW指導を経験する機会としています。

生徒は地図を手に、地形や土地利用、建物の新旧、人の流れ、道路の形、旧河道の痕跡など、地域の特徴を探します。大切にしているのは、単に「地域を知る」ことではなく、見慣れた場所を地理の視点から「知り直す」ことです。実際に歩くことで、「なぜこの街並みなのか」「この地域の課題は何だろうか」といった問いも生まれます。

その後は、FWで見つけた地域の特徴を防災の視点から捉え直し、課題を見いだします。「自分の暮らす地域にも同じような課題はないだろうか」と自身の生活圏へ視点

を広げます。年度末にはこうした学びをふまえ、学校周辺地域の将来像を構想します。生徒の振り返りからは、街の様子を意識して見るようになり、さまざまな立場から地域の将来を考えようとする姿勢がうかがえます。

身近な地域を歩き、見慣れた風景を地理の視点から「知り直す」。そこで得た気づきを、地形や土地利用、人々の暮らしと結び付けて地域の課題を捉え、自分とは異なる立場にも目を向ける。そんな見方や考え方を、これから地域や社会について考えるときにもいかしてほしいと思っています。

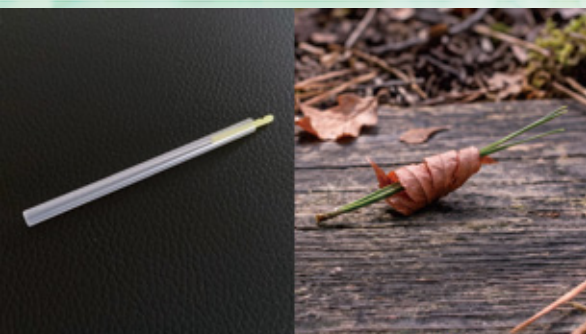


崖から染み出す水を観察し、その理由を考える（護国寺駅周辺）



駅前から一步入った路地を歩き、低層住宅と高層マンションの対比に目を向ける（茗荷谷駅周辺）

台地と谷の高低差を体感し、土地利用の違いを読み取る（護国寺駅周辺）



スポーツデー —理療の歴史に触れ歩く—

理療科教員養成施設 助教 玉井伸典

理療科教員養成施設では、毎年春学期に行事としてスポーツデーを開催しています。今年は神奈川県藤沢市の江ノ島を訪れました。実は、江ノ島は理療と深いゆかりがあります。

日本の伝統的な鍼術である「管鍼術」は、鍼管に鍼を通して用いる点に特徴があります(図1左)。これを確立したのが、江戸時代の鍼医・杉山和一とされています。幼少期に失明した杉山和一は鍼術の道を志し、江ノ島の岩屋で断食修行を重ねました。あるとき「福石」につまずいたことがきっかけで「松葉が枯葉に包まれている様子(図1右)」から管鍼術の着想を得たという言い伝えがあります(諸説あり)。

そのような理療の歴史に触れるべく、運動も兼ねて江ノ島を散策してきました。はじめに杉山和一の墓前に参拝し、続いて福石を訪れました。「つまずいた」という伝承に反

し、学生から「本当に人がつまずくの?」と驚きの声が上がるほど大きな石でした。さらに、修行の地である岩屋にも足を運び、薄暗い洞内を晴眼※の学生が視覚障害のある学生を手引きしながら見学しました(図2)。学生から「教科書で学んだ理療の歴史を肌で感じる事ができて興味深かった」との感想も寄せられ、理療への理解と仲間との親睦を深める有意義な1日となりました。

※視覚障害がないことを「晴眼」といいます。



図2. 岩屋の中を見学している様子

図1. 日本でもよく用いられる鍼(左)と松葉が枯葉に包まれている様子(右) ※左は筆者が撮影した実物の写真、右は生成AIを用いて作成したイメージ

七夕祭り～織姫と彦星の劇～

附属聴覚特別支援学校 幼稚部 教諭 森 敬子



モコモ、織姫と彦星は遊んでばかり、困ったなあ

毎年、幼稚部の七夕祭りで、3年生（5歳児）が、織姫と彦星の劇をします。本番に向け、約一ヶ月の時間をかけて、準備や練習に取り組みました。まず、役を決める前に、絵本や紙芝居を通して物語のイメージをつかんだり、役を交代しながら劇あそびを楽しんだりしました。そして、みんなで話し合いながら、織姫、彦星、ほうき星、牛、鵲などの役を決めました。友達と同じ役をやりたい子、どの役にしようか迷っている子、どうしてもやりたい役がある子と、いろいろな思いがありました。一人ひとりが自分の思いを主張し合いながらの役決めは、とても成長を感じる場面でした。役が決まると、台詞とイラスト入りの台本を見て、台詞や動きを覚える練習が始まります。自宅でもお父さんやお母さんと練習をしました。何度も何度もみんなで練習を重ね、いよいよ本番です。先輩の保護者の方々が作り、手直しをしながらずっと受け継がれている素敵な衣装を着て幕が開きました。子ども達は、緊張しながらも大きな声で台詞を言い、一人ひとりがもっている力を出し切り、立派に劇をすることができました。会場からも大きな拍手をいただき、子ども達の自信に繋がる晴れ舞台となりました。楽しみながら劇の練習に取り組む中で、よく見てよく話を聞く姿勢、友達と台詞や動きを合わせ自分で考えて行動する力、発音に気をつけながら話そうとする意識などもそれぞれ育ってきました。今後の子どものコミュニケーションや言葉の育ちにも繋がっていく七夕祭りとなりました。



こらー、織姫、彦星お仕事をしなさい！

僕たちが天の川に橋をかけてあげるね



インドネシアから広がる国際協働の輪

附属坂戸高等学校 主幹教諭 建元喜寿



APP社スマトラ島植林地での研修

本校ではWWL(ワールド・ワイド・ラーニング)事業の一環として、インドネシアでの国際協働型研修を継続して実施している。研修の目的は単なる海外体験ではない。多様な価値観や専門性を持つ人々との対話を通して、社会課題

の解決に挑戦する探究的な学びを実践することである。

今年度の研修では、国際環境NPO、グローバル企業、パクアン大学、ボゴール農科大学、インドネシア教育大学、SEAMEO BIOTROPなど、さまざまな主体との連携を進めた。また、筑波大学の多文化共修プログラムの一環として大学生も参加し、高校生と大学生が国を越えて共に学びながら課題研究を深める機会となった。

さらに令和8年は、本校の姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校をはじめ、現地の高校、愛媛大学附属高校、栃木県立大田原高校とも協働し、日本とインドネシアを結ぶ高校間ネットワークの構築にも取り組んだ。学校、大学、企業、NPO、地域社会など、多様な主体がそれぞれの強みを持ち寄り、若者たちが国境を越えて学び合い、新たな視点や発想を生み出している。

こうした取組において、本校は単なる参加校ではなく、多様な機関や人々をつなぐ「ハブ」としての役割を担っている。附属学校ならではの教育研究の蓄積とネットワークを生かしながら、次世代を担うユース世代の学びを支えている。来年度からは全員参加型マレーシア研修も始まる予定であり、これまで培ってきた国際的な連携が、新たな学びの舞台を支える基盤になることを期待している。



環境NPOによるインタープリテーション @ボゴール植物園

企業CSRと連携した植林活動



🔍 美しい日本の伝統工芸に触れよう — 高等部「美術」出前授業 —

附属大塚特別支援学校 高等部主事 杉田 葉子

令和8年7月10日に高等部「美術」の出前授業を実施しました。雛人形職人の方を講師に招き、雛人形の歴史や製作工程について、実演を交えて話を伺ったり、伝統的な「木目込み」技法を用いたワークショップを行ったりしました。

雛人形製作の実演では、頭部分に極細の筆で口や髪の毛の生え際等を描き込む様子を見学し、息を飲むような繊細な筆づかいに生徒たちも真剣な表情で見つめていました。

ワークショップでは、「木目込み」の技法を使って、小物入れ作りにチャレンジしました。今回は、人形の土台となる桐塑（桐の木の粉に糊を混ぜて固めた物）の代替として、生徒たちが扱いやすいスタイロフォームに切れ目を入れて布地の端を押し込んで制作し、好きな柄を組み合わせることで素敵な作品に仕上げることができました。



雛人形に実際に触れながら鑑賞



完成した小物入れを持って記念撮影

🔍 つくばっ子が乗り越える3つの山

附属小学校 教諭 青山 尚司

本校の6年生には、卒業までに乗り越えるべき3つの山があります。

1つめは富浦合宿の遠泳です。きらきら輝く水面をきれいな隊列を組んで元気に泳ぎ、全員で完泳を達成しました。

2つめは清里合宿での三ツ頭登山です。仲間と力を合わせてたどり着いた、標高2,580mの山頂には、忘れられない絶景が広がっていました。

そして今、3つめの山、組立運動の「帆掛け船」の練習に励んでいます。

秋の運動会が終わると、いよいよ卒業というゴールが見えてきます。

つくばっ子たちは、険しい3つの山を乗り越えることで、中学校への道を切り開いていくのです。



2つめの山「三ツ頭登山」



3つめの山「帆掛け船」の練習

1つめの山「富浦遠泳」

🔍 5月から6月にかけて健康診断を行いました

附属久里浜特別支援学校 看護師 恒次 律枝

本校の健康診断は、健康診断や病院受診に不安や恐怖を感じている幼児児童が少しでも安心して受けられるように、1週間に1項目ずつの検診を設定し、事前に学級で検診の受け方や流れを練習し、会場となる保健室で他学級と重ならないように時間調整をして行っています。多くの子供たちは繰り返しの経験を通して、落ち着いて受けられるようになっていきます。その姿から一人ひとりの成長を感じると共に、子供が不安に感じているときに丁寧に支援することの大切さを感じます。学校の健康診断は病気の早期発見だけでなく、病院受診の練習にもつながる大切な機会です。学校の保健室という慣れた場所で「大丈夫、できる」という自信を積み上げていってほしいと願っています。



小学部5年生の歯科検診の様子 一人で頑張りました



幼稚園年長の眼科検診の様子担任と手順表を見ながら受けました



IMAGINE
THE
FUTURE.

第12回 共生シンポジウム

～共生社会を目指すつくばふぞくの集い～

令和8年 12月12日(土) 13:30～16:30

会場 筑波大学附属中学校・高等学校 桐陰会館

東京都文京区大塚1-9-1

対面

要申込

参加費無料

13:30 開会

13:33 教育長挨拶

講師紹介

13:40 第1部 講演

14:40 休憩

15:00 第2部 シンポジウム

生徒実行委員会報告
各校代表による発表

16:00 質疑応答

16:20 講師・来賓感想

16:30 閉会



第1部 講演

講師 川本 一輝 氏

かわもと かずき

株式会社 WillShine 代表取締役
筑波技術大学保健科学部情報システム学科4年

「見えない＝できない」を変える
～福祉から事業へ、当事者が拓く共生社会～

講師プロフィール

徳島県出身。視覚障害の当事者として筑波大学附属視覚特別支援学校を卒業し、本シンポジウムの学生実行委員会委員長を経験。現在は株式会社 WillShine 代表取締役として、視覚障害のある子ども向けオンライン個別塾「ブイリーチ」を運営し、見えないことを理由に挑戦が制限されない社会の実現を目指す。

令和8年度附属学校教育局
共生シンポジウム参加申込フォーム
(申込メ切：12/11 金)



URL <https://forms.cloud.microsoft/r/C0036rUS7U>

第2部 シンポジウム

『交流行事を通して』

10月18日開催の「つくばふぞく交流会」に参加した
附属学校児童生徒が語る、交流での体験と学び

筑波大学附属学校教育局

後援 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

ポスターデザイン：筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部専攻科造形芸術科 安田恵

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.67

発行日……令和8(2026)年10月30日

発行者……附属学校教育局教育長 呑海沙織

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙：U-limax [日本製紙]

